

## 少女雑誌の部屋から

今月は、日本の代表的少女雑誌『少女の友』にスポットを当ててご紹介いたします。  
創刊から終刊まで48年の歴史を持ち、少女雑誌史上最高峰とも称されており、今なお人気の高い雑誌です。  
特に、中原淳一の描いた美しい口絵、挿絵、付録は好評を博し、少女たちの憧れでした。毎月、首を長くして発売日を待ち、わくわくしながらページをめくっていた少女たちの顔が目に浮かんでくるようです。  
あなたは少女時代、何に夢中になりましたか？



## 少女の友

実業之日本社

創刊 1908年2月号  
終刊 1955年6月号

『日本少年』の姉妹誌として誕生。家族的親愛主義をモットーに、読者との密接な交流を重視。抒情性を基調に、娯楽、教養的読物、読者からの投書を中心に編集されており、主筆（編集長）が誌面で筆を揮った点にも特色がある。大正時代には川端龍子、竹久夢二らが口絵や挿絵を描き、好評を得た。昭和6（1931）年、内山基<sup>もと</sup>が五代目主筆になった後は、抒情性の中に文化的香気の強い誌面作りがなされるようになり、一流作家陣により多くの少女小説が掲載され、吉屋信子や川端康成の人氣が高かった。また、中原淳一や松本かつぢが挿絵画家として活躍した。戦後は、松本昌美の表紙絵に宝塚歌劇のグラビア、吉屋信子や大佛次郎の小説などが人氣を集め、読者会も盛んに行われたが、読者の感情の変化、週刊誌などの影響を受け、やがて終刊を迎えた。

## 愛読者

小学上級生から女学生（現在の中・高生）くらいの少女たちを対象としており、主に都市部の女学生たちが愛読していました。読者にとってくお友だち>のような存在の雑誌として、健やかな成長を育みました。

## 友ちゃん会

「友ちゃん会」とは『少女の友』の愛読者集会のこと。創刊の翌年から全国各地で開催されていました。当初は「愛読者大会」と呼ばれていましたが、大正10年から「友ちゃん会」の名称になりました。投書でしか知らなかった者同士が、互いに名乗りあい、憧れの存在でもある編集部員や執筆陣と対面することができるという夢のような場で、多くの会の幹事は読者が務めたのだそうです。戦況が深まると一時は影を潜めますが、戦後やがて復活。会報を発行するなどしてさらに活発な活動が行われました。

## 中原淳一降板事件

五代目主筆・内山基により才能を見出され、昭和10年からは表紙絵を担当していた中原淳一。少女たちから圧倒的な支持を得ていました。しかし、昭和15（1940）年、軍部の強圧で、淳一の描く少女像は非健康的であるとして誌面から消えてしまいます。看板画家の突然の降板に、編集部には全国の少女たちから抗議が殺到。読者投稿欄にも「淋しい」といった声が数多く寄せられました。

## 歴代主筆 ※（ ）内は筆名

- 第一代 星野 久（水裏）
- 第二代 岩下天年（小葉）
- 第三代 浅原六朗（鏡村）
- 第四代 岩下天年（小葉）
- 第五代 内山 基
- 第六代 中山信夫
- 第七代 森田淳二郎

二代目、四代目主筆を務めた岩下天年は熊本県山鹿市出身。  
バーネット作の『秘密の花園』を本邦初訳出版しました！

## 少女の友で活躍した作家たち

## 吉屋 信子（よしやのぶこ） 1896-1973

作家。新潟県出身。女学校卒業後に一時小学校の代用教員になるが、文学への志を捨てがたく間もなく辞職。文芸雑誌への投稿を続ける。大正5年、『少女画報』に掲載した「花物語」が人氣となり、以後、次々と少女雑誌に作品を発表。『少女の友』には大正12年の初登場から30年にわたって筆を揮った。

## 川端 康成（かわばた やすなり） 1899-1972

作家。大阪府出身。東京帝国大学国文学科卒業。昭和12～13年、『少女の友』に連載した少女小説「乙女の港」は中原淳一が挿絵を手掛けており、当時の女学生たちの間で一大センセーションを巻き起こした。昭和16～18年には、読者投稿作文の選評を務め、当時の雑誌からは、少女たちと真剣に向き合う川端の姿勢を知ることができる。